

マルクス経済学の成立過程にかんする一考察

——剰余価値論の生成を中心として——

松 田 弘 三

剰余価値論はマルクス経済理論の「核心」¹⁾であり、「礎石」²⁾である。剰余価値論による資本制生産の秘密の曝露は、唯物史観の定式化とともに、社会主義を科学にしたところの、マルクスの「二つの偉大な発見」³⁾の一つである。これらあまりにもよく知られたことがらであるが、マルクス経済学の成立過程を考察する場合、なによりも剰余価値論の生成を樞軸とせねばならぬことを教えているように思われる。もちろんマルクスの経済学説は、史的唯物論の基礎のうえに成立するのであり、マルクスの経済学研究は、その初期においては、史的唯物論の形成とむすびついて行われている。だから、剰余価値論の生成を中心に、マルクス経済学の——とくに剰余価値論の基礎理論である価値論の——成立過程を見てゆくとともに、その世界観の形成にも必要なかぎりふれなければならぬ。

マルクスの経済学研究は、大きく二つの時期に分れる。すなわちその第一期は、一八四三年の経済学研究の開始から一八四八—九年革命までであって、この時期にマルクス—エンゲルスの新世界観（弁証法的唯物論と史的唯物論）が創造されるとともに、またマルクス経済学を貫く問題意識が定立され、その理論的基礎がおかれた。

第二期は一八五〇年の経済学研究の再開から、マルクスの死（一八八三年）をへて、エンゲルスによる『資本論』全三巻の出版完了（一八九四年）までであって、この時期に従来の経済学の全面的な批判的攝取によってマルクスの全経済学説、とくに剰余価値論が完成し、それが『経済学批判』（一八五九年）および『資本論』（第一巻一八六七年）として公けにされた。以下、年代をおってマルクス経済学の成立過程をあとずけてみよう。

① F. Engels, Vorwort zum "Das Kapital", Bd. II. (M.F.J. Institute Ausgabe) S. 4 長谷部文雄訳（青木文庫）(5)九頁。

② N. Lenin, 「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」邦訳『マルクス・エンゲルス・マルクス主義』（国民文庫）第一冊一〇六頁。

③ F. Engels, Herrn Eugen Dührings 'Umwälzung der Wissenschaft', S. 13 邦訳『マルクスエンゲルス選集』第一四卷一〇一頁。

1

カール・マルクス (Karl Marx, 1818—83) は、一八四三年十月、パリに移るとともに経済学の研究をはじめた。ボンおよびベルリン大学の法科の学生として、マルクスは主に哲学と歴史とを研究し、「青年ヘーゲル派」のグループにぞくした。学位論文『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』(Differenz der demokritischen und epikureischen Naturphilosophie, 1841)では、まだ観念論者であったが、すでにヘーゲルにたいして自立していた。彼はその後フョイエルバッハ (Friedrich Feuerbach) の影響をうけ、「ヘーゲル弁証法の観念性を批判するにいたる」(「ヘーゲル國法論批判」(Kritik des Hegelschen Staatsrechts) 一八四三年三月八日執筆)

プロシヤの反動政策のもとで教職につくことを断念したマルクスは、一八四二年十月ケルンの急進的ブルジョアジーの機関紙『ライン新聞』の主筆となったが、そこではじめて「いわゆる物質的利害にかんする論争」(木材盗伐取締法についてのライン

州議会の討議その他）に参加せざるをえなくなった。またフランスの社会主義思想の問題に直面した。そこで経済学と社会主義にかんする知識の不足を痛感した彼は、翌年三月編集を辞すると、かねて婚約中のイェンニー・フォン・ウエストフアールンと結婚し、思想と言論の自由のないプロシヤを去ったのである。

パリでマルクスが最初になしとげた仕事は、ヘーゲル法哲学の批判であって、その成果は一八四四年二月アーノルド・ルーゲとともに発行した『独仏年誌』（*Deutsche-französische Jahrbücher*）に掲載された論文にあらわれている。

すなわちまず、『ユダヤ人問題によせて』（*Zur Judenfrage*、一八四三年九月十月執筆）では、彼は近代社会の政治的国家と市民社会とへの分裂、およびそれに対応する政治的解放（『ブルジョア革命』と「人間的解放」）（『共産主義革命』との区別をあきらかにしている。そして、政治的解放は利己的人間の自由を実現したにすぎず、人間を個人と公民とに分裂させるにすぎないから、それは人間の全的解放ではない。全的解放は、「人間的諸関係の人間それ自身への復帰」、すなわち人間的解放であると結論している。そしてこの解放によって「現実的個別的人間が、その個人的労働、その個人的諸関係において類的存在となり、その本来の力を社会的な力として組織する」社会、すなわち共産主義社会が実現されることを主張している。

さらに彼はユダヤ教の世俗的基礎の曝露に関連して、私利は近代市民社会の原理であり、貨幣はこの社会の排他的な神であることをあきらかにし、「貨幣は人間から疎外された人間の労働および人間の存在の本質であり、この外的な本体が人間を支配し、人間がそのままに拝跪する。」とのべている。ここにすでに人間の疎外および商品の物神的性格の思想があらわれている。

つぎに、『ヘーゲル法哲学批判序説』（*Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Einleitung*、一八四三年十

二月執筆)では、宗教および神学の批判——それはフォイエルバッハによってなすとげられた——にかわつて、いまや法および政治の批判が当面の課題であることがあきらかにされ、さきの立論を基礎として、ドイツにおける人間の解放の可能性が論ぜられている。ドイツでは「根底的な革命」、いいかえればその現状、すなわち封建的秩序にたいしてだけではなく、またその未来、すなわち資本主義的秩序にたいしてもむけられる革命のみが可能であり、またそこでは全般的解放があらゆる部分的解放の必須条件である。

それではドイツの解放の積極的可能性はどこにあるか。答はつぎのような階級の形成にある。すなわち「根底的な鎖をおった一階級」、「社会のあらゆる階層を解放しないではみずからを解放できない一階級」、いいかえれば「人間性の完全な喪失であり、したがって人間性の完全な回復によってしかみずからをかちとることのできない一階級」、すなわち産業運動によって生成しつつある「プロレタリアート」⁹⁾である。

マルクスは哲学をこのプロレタリアートの精神的武器であると声明する。その哲学とは、「人間を人間の至高物と宣言するような理論」¹⁰⁾、すなわち共産主義の思想である。彼はいう。「たしかに、批判の武器は武器の批判にかわることはできぬ。物質力をたおすのは物質力でなければならぬ。しかし理論といえども、それが大衆を把握するやいなや、物質力となる。」¹¹⁾と。

かくして、「ドイツ人の解放は人間の解放である。その頭脳は哲学で、その心臓はプロレタリアートだ。」「哲学がプロレタリアートのうちにその物質上の武器をみいだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神上の武器をみいだす。そして思想の電光がこの素朴な国民の土壌を底ふかくつらぬくやいなや、人間へのドイツ人の解放は成就されるだろう。」¹²⁾

この思想は世界史上はじめてマルクスによって闡明されたものである。彼は、プロレタリアートがただ苦惱する階級であるにとまらないうこと、彼らのおかれてゐる悲惨な状態が、逆いぐたい力で彼らをたえず前進させ、自己の、そしてまたそれによって全人類の解放を、たたかひとらせることをかたつた最初の人であつた。ここにマルクスの窮極目標「人間の解放」が明示され、プロレタリアートが人類解放の歴史的使命を負う階級と規定されたのである。それはマルクスとエンゲルスの終生を貫く根本思想であり、したがつてマルクス経済学もこの根本命題を、資本主義社会の経済的運動法則のうちに論証するものにほかならなかつた。

ところで『独仙年誌』には、以上のほかにフリードリッヒ・エンゲルス（Friedrich Engels, 1820-95）の『国民経済学批判大綱』（*Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie*）がのせられてゐた。エンゲルスは一八四二年、マンチェスターの父の出資してゐた紡績工場に勤務するためイギリスに渡り、イギリスの資本主義社会と労働者階級の状態とにかんする精力的な研究によって、マルクスとは別箇にほぼ同様の思想に到達した。そして一八四四年八月ドイツへの帰途バリーにマルクスをおとすれ、完全な理論的一致をみて、ここに生涯かわることのない親交と協働とがはじまつたのである。

『国民経済学批判大綱』はこれよりさき、イギリス滞在中（一八四三年十二月）の労作であるが、それはマルクスが「天才的スケッチ」と評したものである。そこでは、近代社会の基礎が私有財産にあること、私有財産の結果として商業が生じ、非人間的な競争が必然的となることのがべられ、ついで国民経済学の価値、地代、資本等の概念が吟味され、労働と資本との本源的分離こそ現代のいっさいの分裂が発生する根源であることが示されている。さらにこのような社会における商業恐慌の必然性が論ぜられ、マルサスの人口論にたいする批判がなされている。そして私有財産とそれにもとづく競争との揚棄によつてのみ、「人類の自然および自分自身との和解」が成就されるこ

と、「類意識のない分裂した原子としてではなく、人間として意識的に生産」することによってのみ、すべての対立を克服することができること、が主張されている。

この著作は、エンゲルスが、マルクスとほぼ同様の結論に達していたことを示すばかりでなく、経済学、マルクス主義のこの決定的領域においては、エンゲルスがマルクスに先んじていたことをあきらかにしている。

④ K. Marx, Vorwort "Zur Kritik der politischen Ökonomie" (Institute Ausgabe), S. 4 訳『マルクス—エンゲルス選集』補巻 2 頁。

⑤ Marx-Engels, Gesamtausgabe (Jahrgangsgaben von M.-E.-L. Institute) I Abt. Bd. I (以下 MEWA I/1 と略す) S. 580 訳『選集』補巻 4 一三三頁。

⑥ A. A. O. S. 589 訳一六〇頁。

⑦ A. A. O. S. 599 訳一六一頁。

⑧ A. A. O. S. 633 訳一六七頁。

⑨ A. A. O. S. 619-20 訳一九〇頁。

⑩ A. A. O. S. 630 訳一九一頁。

⑪ A. A. O. S. 614 訳一八三—四頁。

⑫ A. A. O. S. 630-31 訳一九一—二頁。

⑬ MEWA I/2 S. 385 訳『選集』補巻 5 訳二〇四頁。

⑭ A. A. O. S. 301 二二八頁。

マルクスが経済学の研究に着手するにあたって、エンゲルスとの交友があずかって力があつたことは疑いがな
い。マルクスは一八四四年には、フランス革命史を研究するとともに、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』か

ら刺戟をうけて、経済学の系統的研究にとりかかった。そして同年の三月から八月までに、アダム・スミス、リカード、J・B・セイ、シスモンデイ、ペクル、ブレイ、ジェームズ・ミル、スカーレルベック、W・シュルツ、マカロック、トラシー、ボアギューベル等の著作を、——イギリスの学者のものはフランス訳で——読み、老大な抜萃ノートを書き上げた。そして一八四五年のはじめには、『政治および経済学の批判』という表題の全二巻の書物の発行について、出版業者と契約をむすんだ。¹⁵⁾ この書物は出版されなかったが、その手稿は『経済学と哲学

とにかんする手稿』(Ökonomische-Philosophische Manuskrifte. 一八四四年四月—八月執筆)と題して、M・E・I. 研究所版『マルクス—エンゲルス全集』第一部第三巻に発表されている。この『手稿』は、マルクスの経済学研究の最初の独創的な成果であるばかりでなく、彼の経済学研究を貫く問題意識を示したものとして注目すべきである。

『手稿』はまず近代社会の諸階級、すなわち労働者、資本家、土地所有者の地位を、労賃、利潤、地代という経済学的範疇によって分析している。ここで主として利用されているのはスミスの『国富論』であるが——セイ、リカード、シスモンデイ等も引用されているが——、それからひきだされている結論はスミスとは正反対である。すなわちマルクスは、近代社会を諸階級の敵対と闘争の社会として、そしてこの闘争を通じて超克さるべき社会として描きだす。とくに労働者の非人間的状態——労働者は「一箇の商品」であり、「機械になりさがり」、「窮乏」は「こんにちの労働そのものの本質から生ずる」¹⁶⁾——は、シュルツ、ペクル、ビュレ等の社会主義的思想家の著作を引用しながら、生々と描かれている。ところで土地所有は、近代的産業の競争戦にまさこまれた結果として、資本に従属し、両者の区別は解消されて、社会は互は対立する二大階級、労働者階級と資本家階級とに分裂するにいたる。

資本は人間にたいする私有財産の支配を完成した。私有財産とは対象化された労働にほかならない。このように富の本質を労働にもとめたところに国民経済学——アダム・スミス——の偉大な進歩があった。私有財産を人間にたいする対象的存在と考える重商主義者がカトリック教徒であるとすれば、その主体的本質を発見したスミスは「国民経済的ルッター」¹⁷⁾とよんでよい。これによって人間自身が富の本質として認識されたのであるが、そのためにかえって人間自身が私有財産の制約のなかにおかれるのである。「だから労働を原理とする国民経済学は人間を承認するという外観のもとに、むしろ人間の否認を徹底的に遂行するものにすぎない」¹⁸⁾。

それではマルクスは私有財産をいかに解明するか。——我々の眼前に展開される事態はつぎのようなものである。本来ならば労働者にぞくすべき労働の生産物が、彼から独立した疎遠な力として彼に対立し、労働者は富をより多く生産すればするほど、それだけますます貧しくなり、より多くの商品をつくれればするほど、彼はますます安価な商品となる。それは労働の「疎外、外在化」¹⁹⁾の結果である。労働者の彼の労働生産物にたいする関係における疎外は、労働者がより多く生産すればするほど、それだけますます少く消費せざるをえず、より多くの価値を創造すればするほど、彼はそれだけますます無価値になるということ、いかえれば「彼が自己に対立してつくりだす対象的世界がますます強大となり、彼自身すなわちその内的世界がますます貧弱になる」²⁰⁾ということにあらわれている。しかし疎外はたんに労働の結果についてのみならず、労働そのものについても存在する。それは労働が労働者にたいして外的なものであり、彼の本質にぞくさないことであり、労働者は労働の外部ではじめて自己のもとにあると感じ、労働のなかでは自己のそとにあると感ずることである。そしてそれは労働が自発的なものでなくて、強制労働であり、欲望の充足ではなくて、労働以外の欲望を充足するための手段であるか

らであり、また労働が労働者自身のものではなくて他人のものであり、労働において彼は自分自身ではなく他人にぞくするからである。だから労働者は飲食、生殖のような動物的な機能においてのみ自発的であるにすぎず、彼の人間的な機能——労働——においてはかえって動物的であるということになる。

人間は元来一個の類的存在であるが、疎外された労働は人間から自然を疎外し、彼自身を、生産活動と生活行為を疎外することによって、人間を類から疎外する。それは人間にとって類的生活を個人生活の手段にさせる。人間の類的存在からの疎外の直接的帰結は、人間の人間からの疎外である。人間が自分自身に対立するならば、そのときには彼にたいして他の人間が対立する。

それでは労働の生産物が労働者にたいして疎外され、疎遠な力として彼に対立するならば、それはだれにぞくするのであろうか。神にか？ 否。労働と労働の生産物がそれにぞくする他の存在は、ただ人間自身でしかありえない。労働の生産物が労働者にたいして疎遠な対象であるならば、彼から独立した人間がこの対象の支配者である。労働が労働者にとって不自由なものであるならば、この労働はなんらか他の人間に奉仕した、その強制のもとでの行為である。「こうして疎外された、外在化された労働によって、労働者は、労働に縁のない、その外部にたつ人間——すなわち資本家——のこの労働にたいする関係をうみだす。」「それだから私有財産は、疎外された労働の産物であり、その必然的帰結なのである。」²¹⁾

このことからあきらかになるのは、私有財産からの、隷属からの社会の解放は、労働者の解放という政治的なかたちでいあらわされるということである。こういったことから、なにも労働者の解放だけしか問題にならないうというわけではない。労働者の解放のなかには普遍的な人間的解放がふくまれているのである。そしてそれは、

生産にたいする労働者の関係のなかにいつさいの人間の隷屬がふくまれているからである。

以上によって、『手稿』の根本思想が「労働の自己疎外」であることがあきらかである。「疎外」という概念は、直接にはヘーゲルに由来している。『手稿』の最後におかれた「ヘーゲルの弁証法ならびに哲学一般の批判」にのべられているように、ヘーゲルの『精神現象学』の偉大な点は、人間の自己創造を過程として把握し、労働の本質を把握して、人間自身を労働の成果としてとらえたことである。しかし彼の知っていた労働は抽象的、精神的労働であり、そのため彼は労働の肯定的側面のみをみて、否定的側面をみなかった。ヘーゲルにとっては人間は自己意識にひとしいものであり、したがって人間的存在の疎外とは自己意識の外在化にほかならなかつた。マルクスはこの觀念論を徹底的に批判して、「疎外という曖昧な概念を、具體的な理論にかえた。」²²⁾のである。

かくしてマルクスにおいては、人間のすべての自己疎外の根底が、労働の自己疎外に、すなわち生産過程における労働の非人間的なあり方にみいだされたのである。ここに資本制生産関係の、すなわち資本家対賃労働者の階級関係の、端的解明があたえられていることは疑がない。それだけではない。疎外された労働の思想は、『資本論』において具体化された、資本制生産過程の労働過程および価値増殖過程としての二重存在の理論にまで發展すべき萌芽であり、その意味で労働の二重性格の理論ともつながりをもつ。また私有財産を疎外された労働の産物とみることが、商品、貨幣、資本等の物神的性格の曝露の第一歩であることもあきらかであろう。

かくして、『手稿』は弁証法哲学と古典経済学と社会主義思想との——このマルクス主義の「三つの源泉」の——批判的摂取のうえにたつて、マルクスの究極目標——人間の解放——の必然性の根拠を、はじめて資本制生産関係の分析にもとめたものとして劃期的である。しかし疎外された労働の思想はまだそれだけでは経済理論ではない。それは、端的にいえば剰余価値論を、またその基礎としての価値論をもっていないからである。これら

の理論にもとずいてのみ、資本主義社会の経済的運動法則をあきらかにし、その社会主義社会への転化の必然性を、科学的に証明することができる。そしてそのためには、なお二十余年にわたる刻苦にみちた研究過程を必要としたのであり、それは一言でいえば、疎外された労働の思想が剰余価値論によって経済理論化される過程だとはいってよいであろう。そしてその必須の中間項が商品の分析、なかんづく労働の二重性格の把握であることはいうまでもない。²³⁾

⑮ マルクス・エンゲルス・レーニン研究所『カール・マルクス年譜』広島定吉訳三二、三三、三四、三九頁。

⑯ MEGA I/3 S. 45 訳『選集』補4二四三頁。

⑰ a. a. O. S. 107 訳三三〇頁。この言葉はエンゲルス『国民経済学批判大綱』MEGA I/2 S. 383 訳補巻5二〇一頁を踏襲したものである。

⑱ a. a. O. S. 107—108 訳三三一頁。

⑲ a. a. O. S. 83 訳二九九頁。

⑳ a. a. O. S. 83 訳三〇〇頁。

㉑ a. a. O. S. 91 訳三一三頁。

㉒ ルフェーヴル『マルクス主義』竹内良知訳三二頁。

㉓ 長洲一二氏「マルクスのスミス批判」(高島編『スミス国富論講義』5)、および杉原四郎氏「労働の自己疎外とその止

揚」(『関西大学経済論集』一九五一年六月)参照。

さて、マルクス・エンゲルスの最初の協同労作は、『神聖家族、または批判的批判の批判』(Die heilige Familie, oder Kritik der kritischen Kritik)であった。それは青年ヘーゲル派のブルノー・パウアー一派にたいする論戦として、

(一八四四年九月十一日)パリにおいて書かれ、一八四五年二月に出版された。本書において著者たちはまず自らの立場を「現

「実的人間主義」と規定し、現実の個人を自己意識におきかえる思弁的観念論を敵とすることを宣言している。バウアー一派は歴史をつくるものは批判的な個人であるとなし、プロレタリアートを無批判な非活動的な大衆とみなした。マルクス・エンゲルスは断乎としてこれに反対し、プロレタリアの「世界史的役割」を闡明した。プロレタリアートにおいては、あらゆる人間性からの抽象が、もつとも尖鋭な非人間的な生活条件があたえられており、彼らは絶対的な必要によってこの非人間性への反逆を強制されているがゆえに、「プロレタリアートは自分自身を解放しうるし、また解放せざるにはいないのである。」²⁴⁾と。

さらにマルクス・エンゲルスは、本書において、バウアーの観念論に唯物論を対置し、史的唯物論の核心をあたえている。すなわち彼らはバウアーに反対して書いている。歴史的現実の認識は、ある時代の「産業、生活それ自身の直接的生産様式」を認識することなくしては不可能である。「歴史を自然科学と産業とからきりはなし」てはならず、歴史の出生の場は「天上のかすみたなびく雲層のなかに」ではなく、「地上の世俗的な物質的生産のなかに」²⁵⁾みいだされねばならぬと。

一方故郷にかえったエンゲルスは、イギリス滞在中にえた材料によって、『イギリスにおける労働者階級の状態』(The Lage der arbeitenden Klasse in England, 一八四四年十一月—一八四五年三月執筆)をかき上げ、一八四五年六月に出版した。本書は「資本主義とブルジョアジーにたいするおそるべき告発状」²⁶⁾であり、近代社会主義の最良の古典の一つである。なかんずく、つぎになさるべきことは「社会主義とチャーライズム〔すなわち労働者運動〕とを融合させること」²⁷⁾であるとのべているのは、マルクス主義の歴史的役割を闡明したものであるというべきであろう。しかし本書には、「競争があり、ブルジョアジーとプロレタリアートがあるが、資本主義が欠けている。」²⁸⁾いいかえれば剰余価値論がない。そして労働者の状態の

敘述は、人口の集中、都市における住居状態からはじめられ、種々の労働部門における労働条件におよんでいる。このことは、『資本論』においては、それが絶対的剰余価値に関連して労働日からはじめられているのと対照的である。それはプロレタリアートの非人間化に革命性をみとめる、当時の著者の立場を示すものである。

二

マルクスはフランス政府によって追放され、一八四五年二月ブルユツセルに移った。彼はそこでも経済学の研究をつづけ、四月にエンゲルスもやってくると一緒に研究を行い、七月にはイギリスへ六週間にわたる共同研究旅行をし、マンチエスタターのエンゲルスの家で、ペテイ、トゥーク、クーパー、タムソン、コベットの著書を読んだ。²⁹⁾

それと同時に彼らは、ドイツ哲学にたいする対立的見解を共同でまとめあげたことを、彼らの以前の哲学的意識の決算をすることを決心した。それはヘーゲル以後の哲学、すなわちフォイエルバッハ、パウアー、シュティルナー、および「真正社会主義」すなわちカール・グリューンの批判というかたちで、一八四五年九月から四六年七月にかけて遂行され、『ドイツ・イデオロギー』（Die Deutsche Ideologie）と題されたが、その出版は不可能となり、その手稿のうち研究所版『全集』第五巻に発表された。

本書のもっとも重要な部分は、第一部「フォイエルバッハ」であるが、それは主として唯物史観についての説明からなっている。本書はマルクス―エンゲルスによって確立された新世界観、とくに史的唯物論の礎石をおいたものとして劃期的な重要性をもっている。エンゲルスののべているところによると、一八四五年の春彼がブリュツセルでマルクスに再会したとき、マルクスは唯物史観の根本思想を完成して、はっきりした言葉でそれを彼に示した、ということであるが、この史的唯物論の定式化がはじめて本書においてあたえられたのである。著者自身にその要点を語らせよう。³⁰⁾

「我々は……いっさいの人間的存在、したがってまたいっさいの歴史の第一前提を、すなわち「歴史をつくり」うるためには人間は生活することができる状態になければならないという前提を、確認することからはじめなければならぬ。ところで生活の中心をなすものは、第一に、食うことと飲むこと、住まうこと、着ること、その他いくつかのことである。だから第一次的な歴史的行為は、これらの欲望をみたすための手段の産出、すなわち物質的生活そのものの生産である。³¹⁾」ところで生活の生産にはいま一つの側面があつて、「日々あらたに自分たち自身の生活をつくつてゆく人間は、他の人間をつくりはじめある、すなわち繁殖しはじめる」³²⁾のである。そして「生活の生産、すなわち労働においての自己の生活と生殖においての他人の生活との生産は、それ自体一個の二重の関係となつて——一方では自然的な関係として、他方では社会的な関係として——あらわれる。」³³⁾ここで社会的というのは幾人かの個人の協働のことであり、したがつて「一定の生産様式はつねに協働の一定の様式にむすびつき」、「この協働の様式はそれ自体一つの「生産力」である。」³⁴⁾そしてこの「生産諸力の量が社会の状態を制約し、したがつて「人類の歴史」はつねに産業と交換の歴史に関連させて」³⁵⁾理解されねばならぬということになる。「だから、この史観かよりどころとする根拠は、現実の生産過程を、直接的な生活の物質的生産から出発して展開し、そしてこの生産様式と連関しそれからうみだされる交通形態（『生産関係』）を、したがつてまた種々の段階における市民社会を、歴史全体の基礎として把握し、そしてこの市民社会を国家としての活動において叙述する的同时に、意識の種々の理論的産出物と形態との全体を、すなわち宗教・哲学・道徳等々を、市民社会から説明し、それらのものの成立過程を市民社会の種々の段階からあらずけるといふことである。かくしてそこでは当然、事態がその全体性において（そしてそれゆゑにこれらの諸側面の交互作用も）、叙述されうること

になる。³⁴⁾ なおフォイエルバッハについては、マルクスはこれよりさき、四五年三月新世界観の天才的な萌芽をふくむ『フォイエルバッハにかんするテーゼ』を書いている。

かくして我々は一八四五・六年頃までに史的唯物論が成立したとみることができるとしてマルクスの経済理論、とくにその「核心」たる剰余価値論か、この基礎のうえにのみ成立しうることはいうまでもない。

- ⑳ MEGA I/3 S. 207 訳『選集』補巻4 二四三—四頁。
- ㉑ a. a. O. S. 327 訳三七四—五頁。
- ㉒ ローニン「フリードリッヒ・エンゲルス」邦訳前掲書八一頁。
- ㉓ F. Engels, Die Lage der arbeitenden Klasse in England. 訳『選集』補巻2 三五六頁。
- ㉔ 『選集』補巻2 解説五一—三頁。
- ㉕ 『カール・マルクス年譜』四五頁。
- ㉖ エンゲルス『共産党宣言』一八八三年ドイツ語版への序文。『選集』第二巻五三八頁。
- ㉗ MEGA I/5 S. 17 訳『選集』第一巻二四頁。
- ㉘ a. a. O. S. 18 訳二五頁。
- ㉙ a. a. O. S. 19 訳二六頁。
- ㉚ a. a. O. S. 27 訳三九頁。

マルクスがブルジョアで書いた著作には、なお一八四七年七月に刊行された『哲学の貧困』(Misere de la philosophie, 一八四六年十二月—四七年六月執筆)がある。これはプルードン(P. J. Proudhon)の『経済的矛盾の体系、あるいは貧困の哲学』(System des contradiction économique, ou la philosophie de la misère, 1819)にたいする批判であるが、今日では本書の意義はむしろ、マルクスがそこで彼自身の経済学説をはじめて体系的に展開したこと、および『ドイツ・イデオロギー』ではじめて示された唯物史観が、ここではほとんど完全な姿であたえられていることにある。

本書で、マルクスはリカードを徹底的に利用しているが、しかしあきらかにそれより一歩前進している。すなわち彼はまずブルードンの「構成された価値」の批判に関連して価値論を展開し、価値が商品生産にのみ固有な歴史的範疇であることをあきらかにするとともに、価値論の根本問題を解明している。すなわちいう。「複雑労働日の簡單労働日への還元は、簡單労働日そのものが価値の尺度とみなされていることを前提する。」そして「労働量のみがその質にかかわらずなく価値の尺度の役をつとめるということは、簡單労働が産業の樞軸となっていることを前提する。」「そのことは、人間の機械への従属または極端な分業によって、諸労働が平等なものになっていることを前提する。」「この労働の平等化は、まったく近代産業の所産である。」³⁵⁾と、これは抽象的人間的労働の思想の萌芽であるといつてよからう。貨幣論についても同様である。「貨幣とはなにかといえは、物でなくして、社会的關係……一つの生産關係である。」「この關係は一つの環であつて、さういふものとして他の諸關係の全連鎖に緊密にむすびついであり、……一定の生産様式に対応するものである。」³⁶⁾これは価値形態論の萌芽であるといつてよからう。

さらにマルクスは、資本主義社会の労働はそれ自体一箇の商品であるばかりでなく、「商品たる労働」が資本制生産様式の基礎であることをはっきりと認識していた。すなわち彼はブルードンにたいしていつている。「おそれるべき現実である商品たる労働のなかに、彼は一つの文法的省略しかみないのである。だから、商品たる労働を基礎とする現存の全社会は、今後は被格詩に、比喩的表現にその基礎をおくことになるのである。」³⁷⁾と。

つぎにマルクスはブルードンの方法の批判に関連して、彼の経済学の方法論の根本命題をたてている。すなわち「経済的諸範疇は社会的生産諸關係の理論的表現、その抽象であるにすぎない。」そして「社会的諸關係は生

生産力に密接にもずびついている。あらたな生産諸力を獲得することによって人間は彼らの生産様式をかえる。そしてまた生産様式を、彼らの糊口の資をうる仕方をかえることによって、彼らは彼らの一さいの社会的關係をかえる。」「彼らの物質的生産力に対応して社会的諸關係を確立するそのおなじ人間が、彼らの社会的諸關係に対応して、諸原理、諸觀念、諸範疇をもまたうみだす。だからこれらの觀念、これらの範疇は、これらの表示する諸關係と同様に、永久的なものではない。それらは歴史的・一時的産物である。」ブルジョア社会を永遠の自然的な制度であると考えるブルジョア経済学者たちは、自分自身の宗教は神の啓示であるが、それ以外の宗教はみな人間の捏造したものであると考える、神学者たちと同様である、と。かくしてマルクスは、経済学を超歴史的な科学から歴史的な科学に、なによりもまず資本制生産様式を研究する科学にかえたのである。

ところでマルクス―エンゲルスはこのように理論的前進をつづけるとともに、社会主義運動との關係を深めていった。すなわち彼らは、一八四七年六月ロンドンに第一回大会をひらいた秘密の革命的宣伝団体『共產主義者同盟』(Bund der Kommunisten)に参加し、その第二回大会(同年十一月十二月)の委嘱をうけて、同盟の綱領の起草にあたった。その原稿は一八四七年十二月から四八年一月にかけて、マルクスによって執筆され、二月に發表された。これが『共產党宣言』(Manifest des Kommunistischen Part-i)である。

『宣言』を貫いているものは、弁証法的唯物論と史的唯物論、階級闘争およびプロレタリアートの世界史的役割の理論である。まずブルジョアジーが封建社会の胎内から、いかなる發展段階をへて發生してきたか、彼らが社会の生産力をいかに發展させ、しかもいまやかにその生産力を規制しえなくなったかがのべられる。ついて、プロレタリアートがいかに必然的にブルジョアジーとあいともなつて發展し、独立の一階級となつたか、それが

ブルジョア階級にたいするいかなる闘争をへて、革命に到達するかがのべられる。そしてプロレタリアートは、同時に全社会を搾取、抑圧、および階級対立から永久に解放することなしには、自己を解放することができないこと、したがって来るべき社会は、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような協同社会」³⁰⁾であること、があきらかにされている。

かくして『宣言』はマルクス主義の一応の完成であり、マルクス・エンゲルスの全学説のもっとも見事な要約であった。彼らに残された問題はもはや、プロレタリアートの世界史的役割の必然性を、資本主義社会の経済的構造のうちに、理論的に証明することだけであった。

さて、マルクスはこれよりさき(一八四七年十二月)、ブリュッセル・ドイツ人労働者協会で経済学の連続講演をおこない、それはのちに一八四九年四月『新ライオン新聞』に、『賃労働と資本』(Lohnarbeit und Kapital)と題して発表された。(一)の著作でもなお、労働者が資本家に売るものは、「労働力」ではなくて「労働」であるとされている。しかしマルクスは、資本主義社会の労働が一個の商品であり、賃銀はこの労働という商品の価格であることをのべているばかりでなく、労働が商品となるということを、資本主義社会に特有の賃銀奴隷制の表現とみている。

彼はさらに資本を一つの生産関係として扱っている。すなわち、「ニグロはニグロである。一定の関係のもとで、彼ははじめて奴隷になる。紡績機械は木綿をつむぐための機械である。一定の関係のもとのみ、それは資本とたろ。」資本は「一つの社会的生産関係」、「一つのブルジョア的生産関係」である。「直接の生きた労働にたいする、蓄積された、過去の、対象化された労働の支配がはじめて、蓄積された労働を資本とする。」³¹⁾そしてこの資本と労働とのあいだの交換においては、資本家は生活資料と交換に労働をうけとり、「労働者はそれによ

って、彼の消費するものを補填するばかりでなく、蓄積された労働にたいして、それが以前にもつていたよりも大きな価値をあたえるのである。」たとえば、「ある借地農業者が彼の日傭人に、毎日銀貨五グロシエンをあたえる。この銀貨五グロシエンにたいして日傭人は、終日借地農業者の畑で労働し、それによって借地農業者に銀貨十グロシエンの収入を保証する。借地農業者は、彼が日傭人にわたす価値を回収するばかりでなく、彼はそれを二倍にするのである。⁴¹⁾」

エンゲルスはのちに、マルクスが当時（一八四七年頃）剰余価値がなから、またいかにして生ずるかを、きわめてよく知っていたとのべているが、事実右に引用して章句は、まだ剰余価値論とはいえないけれども、マルクスが彼以前のだれよりもいっそう明白に剰余価値の源泉を把握していたことを物語っている。『賃労働と資本』において、マルクスの経済学説はさらに前進したといつてよいであろう。

- ③⑤ Marx, Das Elend der Philosophie, Internationale Bibliothek, S. 26—27 訳『選集』第一卷二九八—九頁。
- ③⑥ a. a. O. S. 38—39 訳三三五頁。
- ③⑦ a. a. O. S. 31 訳三〇三頁。
- ③⑧ a. a. O. S. 30—31 訳三七〇—七一頁。
- ③⑨ Marx u. Engels, Das Kommunistische Manifest, herausgegeben von Duncker S. 41 訳『選集』第一卷五一—六頁。
- ④⑩ Marx, Lohnarbeit und Kapital, 訳同右二四四—六頁。
- ④⑪ 同 二四六—七頁。
- ④⑫ Engels, Vorwort zum "Das Kapital," Bd. II, S. 8 訳⑤一五頁。

『共産黨宣言』の發表とおなじ頃、一八四八年二月二十四日フランスに革命が勃発し、ドイツに波及した。マルクス—エンゲルスはバリをへて、ドイツにかえり、六月一日からケルンで、『新ライン新聞』(Neue Rheinische Zeitung)を發行した。彼らの

めざしたところは、ブルジョア民主主義革命の徹底によって、これを社会主義革命に転化させることであつたが、革命は反動の勝利におわり、『新ライン新聞』も一八四九年五月十八日に禁止された。マルクスは八月ロンドンに亡命し、革命戦争に参加したエンゲルスもやがて彼のあとを追つた。

ロンドン亡命後も、はじめのうちは彼らは革命の再興に望みをかけていた。しかし一八四八年の革命を準備した四七年の恐慌は克服されて新しい未曾有の産業繁栄期がはじまつた。彼らは革命にたいする幻想と手をきり、騒々しい亡命者たちのサークルから離れて、マルクスは一八五〇年の後半から経済学の研究を再開し、エンゲルスは彼を援助するために、十一月マンチユスターに行つて、ふたたび父の商会に入つた。

三

マルクスは史的唯物論の形成過程において、かねてから、「市民社会の解剖学はこれを経済学のうちにもとめるべきである。」³⁾という確信に到達してゐた。だから彼は、すでにのべたように、はやくも一八四五年に経済学批判の著書を出版しようとして計画したのであつた。しかしこの仕事は、国際社会主義運動と、とくに一八四八年の革命とのために中断された。しかるにいまや世界史の新たな発展段階が彼にこの仕事を再開することを決意させた。そしてロンドンはそのためには、大英博物館に累積されてゐる経済学の歴史にかんする膨大な資料とブルジョア社会の観察にとつてそれがもつ都合な地位からいつて、最適の地であつた。プロレタリア的な経済学批判といふかたちで、プロレタリアートの階級闘争の強力な武器を鍛えあげることが、彼は自分の重要な第一の義務だとみなしたのである。かくしてマルクスは経済学の研究に主力をそそぐことになつた。

一八五〇年の秋以来マルクスは大英博物館の図書室に終日を送るようになった。彼は貨幣、信用、および財政等にかんする文献、すなわちJ・S・ミル、フラートン、トレンス、トウーク、ギルバート、ガルニエ、シニア等、およびピールの銀行条例にかんする論争を研究した。翌一八五一年にはヒュームとロックの経済学にかんする著書を読み、スミスの『国富論』やリカードの『経済学原理』をこんどは英語で読みなおし、彼らの他の著書をも研究した。またマルサスの『人口論』や『経済学原理』をも読んだ。彼はさらにオーウエンの諸著作を読み、リカード派社会主義者、すなわちグレイ、レヴィンストン、ホジスキンを研究した。またアンダーソン、ウエストをはじめとする地代論関係の文献や、ペーリー、ジョーンズ、ラムゼイ等をも読んだ。さらに経済の現状を研究するために、『エコノミスト』誌を毎号読んだ。そして一八五〇年から五一年にかけて、彼はノート十八冊を抜萃や書き込みで埋めた。¹¹⁾

しかしながら、『マルクスとエンゲルスの往復書簡にまごまごとしめられているように、亡命生活の事情はきわめて苦しいものであった。貧困は、マルクスとその家族をまさに窒息させようとした。もしエンゲルスのたえざる献身的な援助がなかったならば、マルクスは『資本論』を完成できなかったばかりでなく、物質的窮乏のためにたおれるほかなかったであろう。¹²⁾」マルクスは生活のための仕事に大きな時間をさき、定期的に『ニューヨーク・トリビューン』その他に寄稿していたにもかかわらず、彼の家族の生活はつねに窮乏のどん底にあった。マルクスの窮乏がいかにひどいのかは、彼が六人の子供のうち三人までを幼少のうちにあつたことに示されている。一八五二年春一才になった三女フランテスカが死んだとき、マルクス夫人は、「この子がうまれたときよりかどがなかった。そして最後の小さなやどりさえ、この子にはながくあたえられなかった。」といふた。一八五五年春九歳になった長男エドガーが死んだとき、マルクスは「自分はあらゆる不幸をなめてきたが、いまになって

やっとはんとうの不幸がどんなものかわかった。」とかいた。このような生活のなかでも、マルクスは、一私は万難を排して私
の目的を追求せねばならぬ。そして私自身を^犠もうけ機械にかえてしまふようなことを、ブルジョア社会にゆるしてはならない
のだ。」とさげんだ。⁽⁹⁾一方エンゲルスは、二十年にわたってマンチェスターで、彼のいわゆる「犬の商売」に耐えながら、継続
的にマルクスに援助の手をさしのべた。彼はそのすぐれた才能にとって可能であった科学的遠成をさえ断念して、マルクスの事
業を援助した。それはかたちこそ異っているが、プロレタリアートの、全人類の解放という最高目的のための協働であった。

マルクスとエンゲルスが革命的昂揚の期待をかけた一八五七年の恐慌の息吹きが近づくとともに、マルクスは
ふたたびその本来の仕事と情熱的にとりくんだ。自分のノートを読みかえし整理するとともに、大洪水（「革
命」）のくるまえに、少くとも要綱を明かにしようとおもって、経済学の研究をまとめるために、夜も寝ずに氣狂
いのようになって働いた。そしてこの一八五七—五八年のうちに十二冊のノートを書きあげた。

これらのノートはもはやたんなる抜萃ではなくて、マルクスが自分の見解をまとめたものである。これらのノ
ートは全体として首尾一貫しており、その内容は『資本論』第一巻ごとりあつかわれた問題、すなわち商品、貨
幣、貨幣の資本への転化、剰余価値の生産、生産的労働と不生産的労働、資本の蓄積、本源的蓄積等ばかりでな
く、また第二巻および第三巻ごとりあつかわれた問題、すなわち生産と流通、流動資本と固定資本、資本の再生
産、剰余価値の利潤への転化、利潤率の低下傾向、商業資本、信用および利子等にも及んでいる。⁽¹⁰⁾したがって
『資本論』全三巻に展開されたマルクスの全経済学説は、すでに一八五九年までに、その要綱においてほぼ完成
していたといつてよいであらう。これらのノートは『経済学批判續稿』(Frankfurt über Kritik der politischen Ökonomie,

(10) (11)と題してソ同盟において発表されたが、わが国では未見であった。⁽¹¹⁾ただその一部分『経済学批判の準備的劳作から』

『資本制生産に先行する諸形態』、『経済学批判序説』等が知られているにすぎない。つぎにこれらのものによって、この時期のマルクスの経済理論の一端をうかがおう。

まず『経済学批判の準備的労作から』は、手稿のうち「貨幣にかんする章」および「資本にかんする章」の一部分であつて、恐慌理論にかんする部分をあつめたものである。それはまず、貨幣の流通手段および支払手段としての機能のうちにふくまれている、恐慌の抽象的可能性を考察したのち、資本の生産過程の分析のうちに恐慌の必然性を見出している。そしてその「資本にかんする章」では、労働者が資本家に販売するものが、「労働能力」であり、労働者は「必要労働時間」をこえる「剰余労働」によって、資本家のために「剰余価値」を生産することが、明瞭にのべられている。⁴⁹⁾

また『資本制生産に先行する諸形態』は、資本主義以前の生産諸形態と資本の本源的蓄積にかんする問題をとりあつたものであるが、ここでも「労働能力」、後の箇所では「労働力」という用語がみいだされる。⁵⁰⁾ なおこの草稿では唯物史観の定式化も従来のものよりもいっそう明瞭になされている。

『経済学批判序説』は経済学の対象と方法をとりあつた未完成の天才的序説であるが、『経済学批判』の出版にあつて省略されてしまった。ここにはすでに彼の著作全体の一般的プランが示されている。⁵¹⁾

マルクスはこの時期の他の手稿や手紙において、しばしば彼の著作のプランにたちかえっている。とくに一八五八年二月二十二日づけのラッサールあての手紙では、全体が六部に、すなわち「一、資本について。二、土地所有について。三、賃労働について。四、国家について。五、国際貿易。六、世界市場。」にわかたれた、さらに四月二日づけエンゲルスあての手紙では、その「第一部、資本」がさらに、「第一篇、資本一般。一、価値。二、

貨幣、三、資本、第二篇、競争、第三篇、信用、第四篇、株式資本」にわけられている。⁵²⁾『経済学批判』第一分冊は、「第一部第一篇一、商品、二、貨幣あるいは簡単な流通」のみをふくむ。しかしマルクスは『資本論』全三巻においても、この彼のプランをすべて実現することはできなかった。⁵³⁾

マルクスは一八五八年十月から翌五九年一月までに原稿を執筆して、これをベルリンの出版業者ドウンカーに送り、六月に『経済学批判』第一分冊 (Zur Kritik der politischen Ökonomie. Erstes Heft.) はげいに出版された。

⑬ K. Marx, Vorwort „Zur Kritik der politischen Ökonomie“ (Institute Ausgabe), S. 4 訳『選集』補巻③三頁。

⑭ M. E. L 研究所『カール・マルクス年譜』訳一三八、三九、四四、四七、四八、五一、五三、五四頁。

⑮ レーニン「カール・マルクス」前掲書一三頁。

⑯ F. Mehring, Karl Marx, 栗原佑訳第一卷二七七、二九三、三一六頁等。

⑰ 宇佐美誠次郎氏「マルクスの経済学ノートについて」(『社会科学』季刊②)一三五頁。

⑱ 最近東独より入手しうるようになった模様。

⑲ 『選集』第9卷三一九、二二、二二頁。

⑳ 同右 二七一頁および二七九頁の註。

㉑ Marx, Kritik, (Institute Ausgabe) S. 244-45 訳二九八頁。

㉒ a. d. O. S. 204, 205-9 訳二四一、二四二—二八頁。

㉓ これについては『資本論』がたんにプランの第一部第一篇資本一般だけをふくむのか(久留間敏造氏『マルクス恐慌論研究』、宮崎厚一氏『経済学批判』の体系と『資本論』の対象領域)『経済評論』一九五三年四月など)、あるいはまた第一

部第二篇競争、第三篇信用、第二部土地所有、第三部貸労働をもふくむのか(藤塚知義氏「恐慌論と利潤率低下法則」『経済研究』一九五二年一月)について、議論がわかれている。

本書の序文において、有名な唯物史観の公式が示されている。「私にとってあきらかとなった、そしてひとたび自分のものとなったのちは私の研究にとってみちびきの糸となった一般的結論は、簡単につきのように定式化することができる。人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係を、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係をうけとる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を、すなわち、そのうえに一つの法律的および政治的な上部構造がそびえたち、そしてそれに一定の社会的意識形態が照応する現実的な土台を形成する。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、その発展のある一定の段階で、それらが従来その内部で運動してきた現存の諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないところの所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展形態からその桎梏に急変する。そのとき、一つの社会革命の時代がはじまる。経済的基礎の変化とともに巨大な全上部構造が、あるいは徐々に、あるいは急速に、変革される。……大まかみにいって、経済的社会構成のあいつぐ諸時代として、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的生産諸様式を、あげることができる。ブルジョア的生産諸関係は社会的生産過程の最後の敵対形態である。……ブルジョア社会の胎内に発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をつくりだす。だから人間社会の前史は、この社会構成ともにおわりをつげるのである。」かくして、マルクスの「大衆見の一つである史的唯物論は、ここにその完全な姿をあらわしたのである。」

『経済学批判』は経済学の完全な変革であった。つきにこの変革の主要なモメントをあきらかにしよう。⁵⁵⁾ まず、

マルクスは商品の分析を、使用価値と交換価値との区別からはじめている。この区別は彼の先行者たちもおこなっていたが、マルクスは使用価値と交換価値とが、商品の二つの要因であり、たがいに対立するとともに、また統一をなすことをはじめてあきらかにした。彼は商品をブルジョア社会の経済的細胞形態とみ、この社会のあらゆる矛盾が使用価値と交換価値との対立のなかにひそんでいると考えた。

マルクスはつづいて商品のなかにふくまれる労働の分析に移り、この労働の二重性格をあきらかにしている。古典経済学は商品の価値を労働時間によって規定したが、それはブルジョアの生産を社会的生産の永遠の自然形態とみなしたために、人間の労働がなにゆえに、またいかにして価値をつくりだすかということ、労働生産物はいかなる条件のもとで商品のかたちをとるかということの研究しなかった。マルクスは商品の特殊性と、商品にふくまれる労働の価値形成的性格とをあきらかにした。すなわちブルジョア社会の労働は、一面においては、使用価値をうむ「具体的・特殊の労働」であるとともに、他面においては、交換価値をうむ「抽象的・一般的労働」である。この労働の二重性格の理論は、マルクスの全経済学体系をつらぬく一本の赤い糸となっている。

交換価値を、社会的な、しかも特殊的に社会的な労働の表現とみなすことによって、マルクスは、それが商品生産者の生産関係をあらわすものであること、すなわち交換価値をうむ労働を特徴づけるものは、人と人との社会的関係が、さかさまに、物と物との社会的関係としてあらわされることである、とのべている。かくしてマルクスは彼の先行者が提起しなかった問題、すなわちなぜ商品の生産に支出された労働は価値の形態をとるか、という問題に答えている。

さて、商品は使用価値と交換価値との統一であり、同時に他の商品との関係においてのみ商品である。諸商品

相互の現実の關係は交換過程である。諸商品の交換過程は、一つの特種な商品に対象化されている個人的労働が、直接に一般的労働の性格をもたざるをえないという矛盾を發展せしめる。そしてその解決が一般的等価物としての貨幣の形成である。それゆえに貨幣は交換過程によってのみみだされた、すべての商品の交換価値を表現する特種な商品、諸商品の交換価値の結晶である。このようにマルクスは貨幣の本質を規定したのち、古典学派が主として流通手段の視角から理解した貨幣の機能を、価値尺度、流通手段、蓄藏貨幣、支払手段、および世界貨幣の諸機能において、正しく統一的に把握している。

『経済学批判』第一分冊は、商品および貨幣の分析をもっておわっている。しかしすでにみたように本書の執筆以前に、マルクスの全経済学説は一応でき上っていた。とくにその核心としての剰余価値論も完成していた。そしてそれは経済学の最大の変革であった。だがこの資本にかんする分析を公けにするまでには、なお八年の努力を要したのである。

④ K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. 5-6 訳『選集』補卷3 三十四頁

⑤ ローゼンベルグ・ブリューミン『経済学史』下巻広島定吉・橋本弘毅訳六〇一—八頁参照。

⑥ Marx, a. a. O. S. 21 訳一九頁。

四

『経済学批判』の出版後、マルクスはただちにその経済学の仕事を再開した。一八五九年十月から六〇年一月にかけて、彼はまた大英博物館に通い、スミス、リカード、マルサスなどを読みなおし、エンゲルスの『イギリ

スにおける労働者階級の状態』や、一八五五—五九年の『工場監督官報告』を研究した。また六〇年の後半にはシスモンディや重農学派の著書を読んだ。⁵⁷⁾しかしフォークトの虚偽の誹謗にたいする反駁(『フォークト氏』Harr. Vogt, 1860)や、それにつづく病氣のために多くの時間が失われた。

一八六一年八月にいたつてようやく執筆にとりかかり、その叙述を「貨幣の資本への転化」からはじめた。そしてその年のうちに「絶対的剰余価値」および「相対的剰余価値」の章を、すなわち『資本論』第一巻の主要部分の最初の仕上げを書いた。翌六二年は草稿の執筆に専念し、四月から十一月までに「剰余価値にかんする諸学説」を書き上げ、五月から八月までに「地代論」を仕上げ、年末には「資本と利潤、剰余価値と利潤、利潤率、商人資本」を、すなわち『資本論』第三巻で取扱われた諸題目を書いている。そして年末には準備中の著作を、もはや『経済学批判』の続巻としてではなく、『資本論——経済学批判』という独立の著書として出版する予定をたてている。一八六三年にはさらに相対的剰余価値の章のうち分業や機械にかんする部分を補足し、「資本の蓄積、本源的蓄積、植民制度、資本の再生産過程」、すなわち第一巻の残りの部分と第二巻の最後の部分について書き、またケネーの経済表を改変した、再生産過程の図表をエンゲルスに示している。かくして六三年の七月までに二十三冊のノートができ上つた。⁵⁸⁾

だがこの一六二年および六三年は、マルクスがいっそうはなほだしい窮乏におちいった年であつた。アメリカの内戦のために『ニューヨーク・トリビューン』からの収入を失った彼は、幾週間も無一文で暮し、質屋によって生活した。彼はついに鉄道事務所への就職をさえ考へたが、採用されなかつた。またエンゲルスの妻メリー・バーンズの死にあたって、マルクスが十分な同情を示すかわりに、窮乏をうったえた手紙を書いたために、エンゲルスとのあいだに一時感情の齟齬をさえきたした。それはただちに和解され、エンゲルスの援助がつけられたが、たびたびの病氣が仕事を中断させた。⁵⁹⁾

一八六四年および六五年も『資本論』の仕上げのための仕事がつずけられ、多くの新しい事項が書き加えられた。そして六五年の七月にはエンゲルスにあてて、理論的部分(最初の三卷)のためにあつと三章書かねばならぬこと、全著作は一つの「芸術的全体」をなしているので、全体ができ上らないうちはけつして印刷には付さないこと、を告げている。しかし同年の末には全二卷の草稿はついに書き上げられた。⁶⁰⁾

しかしながら、マルクスはこの間けつして著述にのみ没頭していたわけではなかつた。一八六四年九月「国際労働者協会(第一インターナショナル)」が創立されたが、マルクスはこの協会の魂であり、その『創立宣言および規約』をはじめ、無数の決議や声明や楸の起草者であつた。この驚くべき理論的および実践的活動と困窮した生活とはマルクスの健康をすっかり損い、彼に『資本論』の後の二卷を自分の手で出版することを不可能にしたのである。⁶¹⁾

一八六六年の一月一日から、マルクスは第一卷の清書と文体の訂正とをはじめた。補足もなおおこなわれ、労働日にかんする章の歴史の部分は著しく拡張された。清書は翌六七年の三月に終つた。十一月に最初の原稿がハンプブルグの出版業者マイスナーに送られ、残りの部分は翌六七年の四月にマルクス自身が届けた。このころのある手紙のなかで、マルクスはつぎのようにその真情を吐露している。「私は、力のつづくかぎりには、私の著作を完成するために、寸刻を惜んで働かねばなりません。私はこの仕事のために、自分の健康、幸福、生活および家族のすべてを犠牲にしたのです。私はいわゆる「實際家」および彼らの賢明さなるものを嘲笑します。家畜になりたければ、人類の苦惱に背を向けて、自分の毛並みだけを心配しておればもちろんよろしい。だがもしも私が、手稿でなりと私の著述を完成しないでヘタばつたならば、それこそ私は自分を本当に「非實際的な」人間だと考へてしよう」と。⁶²⁾八月十六日校正を終了し、最後の頁まで印刷所へ送送したのち、マルクスは午前二時にエンゲルスにあててつぎのように書いた。「やつといま、この一巻の準備が終つた。この仕事のできたのは

まったく君の念かけだ。君の献身的な援助がなかったらば、僕はとうていこの龐大な全三巻を完成することはできなかっただろう。万際の感謝をもって君を抱く！」と、『資本論』第一卷(Das Kapital—Kritik der politischen Ökonomie, Kraker Band)は一八六七年九月二日ごろ出版された。それはまことにマルクスが心血をぞそいだ畢生の大著であった。彼自身のいつているように、「この種の著作にして、これほどの難境のもとに書かれたものはないかもしれない。」⁹¹⁾のである。

③ M・E・I研究所『カール・マルクス年譜』訳二八四、八七、三〇〇頁。

④ 同右 三一八、一九、二〇、二二、三四、三七、三八頁。なお Engels, Vorwort zum „Das Kapital“, Bl. II, S. 4 訳⑤ 八一九頁。

⑤ Mehring, Karl Marx, 訳三八六—八頁。

⑥ 同右 三四一、五六、七一、七六頁。

⑦ Engels, Vorwort zum „Das Kapital“, Bl. II, S. 5 訳⑧ 一七頁。

⑧ 一八六七年四月三十日づけマイヤーあての手紙。(訳文は宮川実氏『資本論研究』4二五頁による。)

⑨ 同右 二六頁による。

⑩ 一八六七年十月十一日づけクレーゲルマンへの手紙、邦訳全集二十一卷五八頁。

『資本論』第一卷の序文の六かたで、マルクスは本書の研究対象、目的、および立場をあきらかにしている。すなわち彼は、「私がこの著作で研究せねばならぬものは、資本制生産様式、およびこれに照応する生産たるびに交易諸関係である。」といい、また「近代社会の経済的運動法則を曝露することは本書の最後の窺極目的である。」とのべている。さらにまた「経済的な社会構造の發展を一つの自然史的過程と解する」ことが、自分の立

場であることを示している。⁶⁵⁾レーニンはこの後の二つの箇所について、「ここに『資本論』の基本思想がある。⁶⁵⁾」
と述べている。「経済的運動法則」の意義については、第二版（一八七三年）の後書きに、マルクスが完全な同意
をもつて引用している、『資本論』の方法をあっかつた論文（『ヴェストニク・エヴロパイ』誌）中のつぎの一
句がそれにあたると思われる。すなわち、「あるあたえられた社会的有機体の発生・存立・発展・死滅・および
より高等な他の有機体による元の有機体の交替を規制するところの、特殊な諸法則」と。⁶⁷⁾かくして『資本論』の
内容は、資本制生産様式を、その発生、発展、消滅において研究することにあつた。

『資本論』第一巻の第一版は六章からなつていたが、第二版ではそれが七篇二五章に分けられた。まず第一篇
「商品と貨幣」は、まえの著作『経済学批判』の概括であるが、たんなる反覆ではなくて、叙述が改善されてい
る。すなわち「以前にはただ暗示されただけの多くの点がここでは一步すすんで展開され⁶⁵⁾」ている。つぎにそれ
らの点を考察しよう。⁶⁸⁾

『資本論』においても、マルクスは資本制生産様式の支配する社会の富の原基形態としての商品の分析からは
じめ、商品がその有用性によって使用価値であるとともに、使用価値は交換価値の質料的担い手をなすとのべて
いる。だがこの交換価値の内実は、商品の交換関係によって表示される第三の共通者は、人間的労働であり、商
品は、それらに共通なこの社会的実体の結晶としては、「価値」であることをあきらかにしている。⁷⁰⁾このように、
マルクスは価値を交換価値から抽象して研究したのち、ふたたびその現象形態たる交換価値へ帰ってくる。『経
済学批判』においては、すでにみたように、価値もその現象形態もともに交換価値とよばれていたのである。

つぎに『資本論』では、「商品で表示される労働の二重性格」が、すなわち「具体的・有用的労働」と「抽象

的・人間的労働⁷¹⁾」とが、『経済学批判』におけるよりも、いつそうくわしく研究されている。マルクスによれば、商品に、ふくまれている労働の二者闘争的性格は、彼によってはじめて批判的に指摘されたものであり、それは「経済学を理解するための枢軸⁷²⁾」であり、また彼の著書の「最良の部分」の一つである。⁷³⁾

さらに「価値形態」にかんする理論は、はるかに拡大され、いつそう精密化されている。それは第一版ではクーゲルマンのすずめにしたがって、附録において敷衍^{ふえん}され、第二版においてそれが本文にとりいれられた。⁷⁴⁾ 価値形態にかんする学説の核心である、一商品の価値は他の商品の使用価値においてのみ表現されるという思想は、『経済学批判』のなかですでに基礎づけられていたが、それはここで全面的に研究され、価値表現の両極（「相対的価値形態」と「等価値形態」および価値形態の発展（「簡単な価値形態」、「総体的価値形態」、「一般的価値形態」、「貨幣形態」）が分析されている。

商品の分析は、「商品の物神的性格とその秘密」にかんする理論をもっておわっている。『経済学批判』のなかで、すでにみたように、商品生産社会においては、人と人との社会的関係が物と物との社会的関係としてあらわれることが示されていたが、それはここでいっそう厳密に基礎づけられるとともに、他の生産諸形態との比較において詳細に解明されている。

貨幣の本質とその機能との研究においては、『経済学批判』とのあいだに大きなちがいは存在しない。貨幣理論については、むしろ『批判』の方がいっそう詳細である。⁷⁵⁾

⑤ K. Marx, *Das Kapital*, Pt. I, S. 6, 7, 8 長谷部訳(1)七二、七三頁。

⑥ レーニン「人民の友とはなにか」『レーニン全集』第四版第一卷一一八頁邦訳一二九頁。

- ① Marx, a. a. O. S. 17 訳八五頁。
- ② a. a. O. S. 5 訳六九頁。
- ③ ローゼンベルグ・ブリュエーミン『経済学史』下巻訳六一九—二二頁参照。
- ④ Marx, a. a. O. S. 42 訳一一九頁。
- ⑤ a. a. O. S. 51 訳一三二頁。
- ⑥ a. a. O. S. 43 訳一一三頁。
- ⑦ 一八六七年八月二十四日づけマルクスのエンゲルスへの手紙。p. p. O. S. 80 訳（旧日評社版）一二七〇頁。
- ⑧ 第二版への後書き p. p. O. S. 10 訳七五頁参照。なお長谷部文雄訳『資本論初版鈔』（田岩波文庫）参照。
- ⑨ 『経済学批判』への M. P. L 研究所の序文。Kritik, S. V 訳三〇五頁。

『経済学批判』は、商品と貨幣の分析をもって終わっている。しかるに『資本論』はさらに資本の分析にすぎみ、マルクスの全経済学説の「礎石」である、剰余価値論を展開している。それは第二篇より第五篇まで、とくに第二篇第四章「貨幣の資本への転化」、第三篇第五章第二節「価値増殖過程」および第六章「不変資本と可変資本」、第七節「剰余価値率」においてのべられている。⁷⁶⁾ 『資本論』第二巻の序文のなかで、エンゲルスは、マルクスの剰余価値論の歴史的意義をあきらかにしている。彼はまず古典経済学者（スミス、リカード）およびリカード派社会主義者（『国民的苦難の根源および救済策』の著者、タムソン、——ロードベルスは彼らとおなじ水準にある）による剰余価値の認識を素描したのち、これらの社会主義的先駆者にたいするマルクスの関係を、化学の歴史における、酸素をつくりだしながらなお燃素説にとらわれていたプリーストリおよびシェーレにたいする、酸素の発見者であり近代化学の創始者であるラヴォアジエの関係に比している。「我々がいま剰余価値と

名ずける生産物価値部分の実存は、マルクスよりも久しく以前から確認されていた。またそれがなから成立つかということ、すなわち取得者がなんらの等価も支払わないうえに労働の生産物から成立つということも、明瞭の差こそあれおなじように説かれていた。だがそれ以上には出なかった。……そこへマルクスが現われた。しかも先行者のすべてにたいする直接的対立において、彼らがすでに解答をみたところに、マルクスは問題のみをみた。彼は……ここで問題なのは一経済事実のたんなる確認でもなく、この事実と永遠の正義および真の道徳との衝突でもなく、全経済学を改革する使命をもつ一事実、用法を心得た人の手に全資本制生産の理解の鍵を提供する一事実であることをみたのである。この事実を手がかりに彼は……既存の範疇のいっさいを吟味した。剰余価値がなんであるかを知るために、彼は価値がなんであるかを知らねばならなかった。⁷⁹⁾ 価値とはなにかという問題にたいしては、『経済学批判』および『資本論』第一巻第一篇において、あますところなき解答があたえられた。剰余価値論の理論的基礎をなすものは、第一に商品を生産する労働の価値形成的性格の把握、それと使用価値の源泉としての具体的労働との区別、いいかえれば労働の二重性格の認識である。

マルクスの先行者たちはすべて、剰余価値をその特殊の形態においてのみ、——すなわちペテイおよびケネーは地代の形態において、スミスおよびリカードは利潤の形態において、またロードベルスは賃子 (Rente) の形態において、——把握した。しかるにマルクスは剰余価値を、その特殊の諸形態たる利潤・利子・地代等から抽象して、これらすべてがまだ分離していないその一般的形態において把握し、それによって資本制生産の秘密を、その階級的敵対の根源を、曝露したのである。ここに彼の著書の「最良の部分」のいま一つのものがある。⁷⁹⁾

マルクスの剰余価値論の理論的基礎の第二の点は、労働と労働力との区別である。彼は貨幣の資本への転化を

研究して、それが労働力の売買にもとづくことを証明した。彼はここで「労働力」——価値創造的屬性——を労働のかわりにもってくることによって、古典経済学を崩壊させた諸困難の一つ、すなわち資本と労働との交換を、労働時間による価値の決定と調和させることの不可能を、一挙に解決したのである。かくして、労働者が、労働力の価値——それはこの商品の生産に社会的に必要な労働時間によって、すなわち労働者とその家族の生活資料の生産に必要な労働時間によって規定される——の等価を再生産する時間(「必要労働時間」)をこえて、資本家のために労働させられる時間(「剰余労働時間」)において、剰余価値が生産されるのである。それゆえ、「剰余価値をたんなる剰余労働時間の凝結、たんなる対象化された剰余労働として把握することは、剰余価値の認識によって決定的である。」⁸⁰⁾

マルクスは資本制生産過程を分析して、それが「労働過程」と「価値増殖過程」との二つの面をもつことをあきらかにした。すなわち、人間生活の永遠の自然条件である労働過程においては、生産者は人間として自然に働さかけ、自己の生活資料を獲得するとともに、自然と彼自身とを変化させるが、価値増殖過程すなわち剰余価値の生産過程においては、労働者は資本家の統制のもとで労働し、その生産物は資本家の所有物であって、彼は資本に属するところの、生産手段と異ならぬたんなる物にすぎないことをあきらかにした。⁸¹⁾それは若きマルクスが展開した「労働の自己疎外」の思想の、いっそうの発展であり、完成であるといつてよからう。

マルクスはこの剰余価値の生産に関連して、決定的に重要な資本区分——「不変資本」(生産手段に投下された資本部分)と「可変資本」(労働力に投下された資本部分)とへの——をおこない、また資本による労働の搾取度を表現するところの「剰余価値率」
$$\frac{\text{剰余価値}}{\text{可変資本}} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}}$$
をあきらかにしている。

剰余価値の生産は二つの主要な方法によっておこなわれる。すなわち、労働日の延長による方法（「絶対的剰余価値の生産」―第三篇）と、必要労働時間の短縮、およびこれにもなう労働日の両構成部分の量的割合の変化による方法（「相対的剰余価値の生産」―第四篇）とである。前者に関連してマルクスは、労働日の制限をめぐる労働者階級と資本家階級との闘争を分析し、後者に関連して、資本主義によってなされた生産力発展の三つの主要な歴史的段階――(1)協業、(2)分業とマニユファクチュア、(3)機械と大工業――を分析している。

第五篇（絶対的および相対的剰余価値の生産）をもって、本来のない狭義の剰余価値論はおわる。そこでここに一言マルクス剰余価値成立の歴史的、理論的背景にふれておきたい。さきへのべたように剰余価値論は、一八五〇年代のマルクスの経済学研究の成果として、その後半（一八五七・八年）に成立するのであり、以後六〇年代はその整備、完成の時期であるとおもわれる。ところでこの一八五〇、六〇年代は、資本主義の先進国イギリスにおいて、最初の実効ある工場法が制定された一八三三年以降の、近代的な資本と労働との標準労働日をめぐる闘争が頂点に達する時期であり、マルクスが労働時間の意義を極度に重要視し、剰余価値を剰余労働時間に還元することに⁵²⁾よって、資本制生産関係の本質を把握したのも、この労働者階級の歴史的体験に学ぶところが多かったものと⁵³⁾おもわれる。一八四〇年代の「労働の自己疎外」の思想においては、資本主義社会における労働の非人間的性格が鋭く曝露されながらも、いまだそれが経済理論化されていなかったのであるが、ここに労働日の必要労働時間と剰余労働時間とへ分裂の把握によって、全経済学説の核的理論としての剰余価値論が形成されたのである。さらに理論的には、古典経済学、とくにリカードの労働価値説のいっそう徹底的な批判的摂取とともに、リカード経済学の社会主義的応用者たち、とくにはじめて「剰余価値を剰余労働に分解」した『国民的苦難の根

源および救済策」の著者にも示唆をうけたものと思われる。マルクスがこの著書を読んだのはおそらく一八五一年頃であろう。⁸⁴⁾だがエンゲルスののべているように、剰余価値論を創始し、それによって全経済学を変革したものはもとよりマルクスであった。

⑦⑥ マルクス剰余価値論の概要については、拙稿「剰余価値説の成立過程(一)」(『立命館経済学』第二巻第五号)九七一—〇三頁参照。

⑦⑦ 古典経済学および初期社会主義経済学による剰余価値認識については、「剰余価値説の成立過程(一)」および「(二)」(同右第二巻第六号)において略述した。

⑦⑧ F. Engels, Vorwort zum „Das Kapital“, Bd. I, S. 15, 16 訳⑤(二五—二七頁)。

⑦⑨ 一八六七年八月二十四日づけマルクスのエンゲルスへの手紙 Das Kapital, Bd. I, S. 839 訳(旧日評社版)一二七〇頁。

⑦⑩ Das Kapital, Bd. I, S. 225 訳②(三八五頁)。

⑦⑪ a. a. O., S. 185, 192, 193 訳②(三二九、三三九、三四一頁)。

⑦⑫ ルフェーヴルも、「史的唯物論は一八四四—五年に発見されていた。剰余価値の理論は、弁証法的方法の明晰な使用およびその資本主義への適用とおなじく、一八五七年にあらわれた。」(邦訳『マルクス主義』二九頁)とのべている。

⑦⑬ 杉原四郎氏「マルクス剰余価値論にかんする一考察」(『関西大学経済論集』一九五二年十二月)参照。マルクスは第八章「労働日」で一八三三—六四年のイギリスにおける標準労働日のための闘争を詳細にあとずけるとともに、商品交換の法則にもとずく労働者の標準労働日要求の主張において、一八六〇—六一年の罷業中のロンドンの建築労働者の声明を、ほとんどそのまま利用している。(a. a. O., S. 212 訳②(四一〇頁))

⑦⑭ 『カール・マルクス年譜』によってもその年は確定しえないが、一八五一年にはレヴンストーンおよびホジスキンを罷んでいるので、おそらく同年頃であろうと思われる。

つぎに第六篇「労賃」においては、労賃が労働力の価値または価格の転化形態であることがあきらかにされ、

労賃の形態がいかに資本家による労働者の搾取を、偽装し、隠蔽するかが示されている。

最後の第七篇「資本の蓄積過程」においては、まず資本制生産にとっては単純再生産ではなく拡大再生産が典型的であるが、拡大再生産においては、自分の労働を基礎とする商品生産の所有法則が必然に、他人の労働の搾取にもとづく資本制的占有の法則に転化することが明らかにされている。さらに資本の蓄積は、資本の有機的構成の高度化、すなわち不変資本にたいする可変資本の相対的減少をとめない、その結果として必然的に、「相対的過剰人口」または「産業予備軍」がうみだされることになる。かくして、一方の極における富の蓄積と、他

方の極における貧困の蓄積——これが「資本制蓄積の一般的法則」なのである。つづいて資本制生産の歴史的前提をつくりだした「本源的蓄積」、すなわち労働力の商品化のための条件たる自由な労働者をうみだしたところの、直接生産者からの生産手段の収奪——とくに農民からの土地収奪——の過程が分析され、最後に「資本制蓄積の歴史的傾向」がつぎのように特徴づけられている。——直接生産者の収奪によって、個々の労働する個人とその労働条件との密着に基礎をおく私有は、他人の労働の搾取に基礎をおく資本制的私有によっておきかえられた。いまや収奪さるべきものは多くの労働者を搾取しつつある資本家であり、この収奪は、資本制生産の内在的法則の作用によって、すなわち資本の集中によってなすとげられる。それとともに、労働過程の協業的形態、科学の技術的应用、土地の計画的利用、労働手段の共同的にだけ使用されうる労働手段への転化、等々が發展する。「この転化過程のいっさいの利益を横奪独占する大資本家たちの致がたえず減少するにつれて、貧困・抑圧・隸属・墮落・搾取の量が増大するが、しかしまた、たえず膨脹し、そして資本制生産過程そのものの機構によつて訓練され、結合され、組織された労働者階級の叛道も増大する。資本独占は、それとともにそれのもとの開花し

た生産様式の榨桔となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本制的外被ともはや両立しえなくなる点に到達する。この外被は粉碎される。資本制的私有の終焉を告げる鐘がなる。収奪者が収奪される。⁸⁵⁾

マルクスの経済学体系は、もとよりこれをもって完結するのではない。『資本論』第一巻は「資本の生産過程」をとりあつかっているが、それは「資本の流過程」によって補足され、さらに「資本制生産の総過程」において、全体として考察された資本の運動過程から生ずる具体的諸形態が叙述されねばならぬ。マルクスはこの『資本論』の続巻の著述のために、なお十六年間にわたって、次第に悪化する健康状態と闘いながら研究をつづけ、とくに一八六八—七〇年および七十七—七八年には第二巻のための草稿をかいている。一八八三年三月一四日のマルクスの死ののちは、エンゲルスがその編集と出版の仕事をうけつぎ、異常な努力によって、一八八五年に『第二巻』を、彼の死の前年一八九四年に『第三巻』を出版した。第二巻は「資本の循環」、「資本の回転」、および「社会的総資本の再生産と流通」をふくみ、第三巻は、まず「剰余価値の利潤への転化、平均利潤率の形成」をとりあつかったのち、利潤の一部の「商業利潤」への転化、「利潤の利子と企業者利得への分裂」、および「超過利潤の地代への転化」を研究している。すなわちここでは剰余価値の特殊的諸形態が分析されているのである。さらにマルクスはエンゲルスが『資本論』第四巻に予定していた一八六二年の「剰余価値にかんする諸学説」の草稿は、カウツキー (Karl Kautsky) によって独立の著作『剰余価値学説史』(Theorien über den Mehrwert) III 巻として一九〇五、一〇年に出版された。⁸⁶⁾ だがわれわれの主題にとっては、一応『資本論』第一巻まででおわることができよう。とくにさきに引用した「資本制蓄積の歴史的傾向」は、ある意味で『資本論』全巻の結語ともみることができるといえる。

五

元来マルクスの経済学研究の目的は、彼がすでに青年時代（一八四三年）にあきらかにした窮極目標——人間の解放、およびこれを実現すべきプロレタリアートの世界的使命の必然性を、資本主義社会の経済的運動法則のうちに、証明することにあつた。それはもとより『資本論』全三巻によって科学的に論証されているのであるが、右の「歴史的傾向」の節のうちにとくに明確に定式化されている。すなわち「生産手段の集中と労働の社会化」とが「それらの資本制的外被と両立しえなくなる」⁸⁵⁾といかえれば、「社会的生産と資本制的占有とのあいだの相剋」が、資本制的占有様式の、生産力の社会的本性にもとづく生産物の占有様式——すなわち生産手段の社会的所有と生活資料の個人的所有——への転化を、必然ならしめるのである。そしてそれによって、人間ははじめて「自然」と「自分自身の社会組織の主人」となり、「十分な意識をもって自分の歴史をつくるようになる。」⁸⁷⁾

「これは必然の王国から自由の王国への人類の飛躍である。」

それではマルクスにおける人間の解放の意義あるいは内容はなんであつたか。それは人間能力の自由な発展にほかならない。このことはさきに引用した『共産党宣言』中の一句「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような協同社会」⁸⁹⁾によってあきらかであるが、そのためには労働生産力の高度の発展によって労働日が短縮されることが必要である。マルクスは、労働を人間の本質的機能と考え、共産主義社会においては労働が「生活のための手段であるばかりでなく……生活の第一の欲求」⁸⁸⁾とさえなりうることを認めながら、しかもいつている。「自由の国は、事実上、窮迫と外的合目的性によって規定される労働がなくなるところで、はじめて始まる。したがってそれは、事柄の本質上、本来的な物質的生産の彼岸によこたわる。……この領域における自

由は、ただ社会化された人間、結合した生産者たちが、彼らの自然との質料交換によって、盲目的な力によってなされるかのように支配されることをやめ、これを合理的に規制し、彼らの共同的統制のもとにおき、最少の力の支出と彼らの人間性にもっともふさわしい条件とをもって、この機能をおこなうという点にのみありうる。しかしこれはなお依然として必然の国である。その彼岸に、自己目的としておこなわれる人間の力の発展が、真の自由の国がはじまる。しかしこの国はかの必然の国を基礎としてのみ、開花しうるものである。労働日の短縮がその根本条件である。⁹¹⁾もとよりマルクスは、すべての人にとってこの「自由にしうる時間」を實現し、しかも「協同社会的富のあらゆる噴泉があふれ出」て、各人がその「能力に応じて」⁹²⁾労働し、「その必要に応じて」取得しうるためには、社会革命が必要であることをけっして見逃さなかつた。いな、彼にとっては社会革命は、このような人類の理想の實現を可能にする唯一の道だったのである。人間能力の無限の発展のための自由な時間の獲得、そのための労働日の短縮——マルクス経済学の窮極目標をあきらかにした右のことばとともに、われわれもこの考察をおわることにしよう。

⑨① Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 802-8 訳(4)一一五八—一六〇頁。

⑨② カウツキー版の『剰余価値学説史』は、配列の変更や原文の改作や削除など著しい歪曲がなされているとのことであるが、M・E・L 研究所で準備されているその科学版においてはマルクスの手稿が忠実に復元される予定である。(『経済学の諸問題』一九五〇年第九号参照)

⑨③ F. Engels, Anti-Dühring, S. 291, 301, 305-5 訳『選集』第一四卷四六〇—一六一、四七三、四七七一—八頁。

⑨④ マルクスにおける労働日短縮の思想の特徴については、杉原四郎氏「必要労働と剰余労働」(『人文学論集』一九五〇年三月)一一三—一九頁参照。

⑨⑤ Marx, Kritik des Gothaer Programms, 『ヘータ綱領批判』訳『選集』第一二卷二四三頁。

⑨⑥ Marx, Das Kapital, Bd. III, S. 873-4 訳(3)一一五—一五六頁。

⑨⑦ Marx, Gothaer Programms, 訳二四三—四頁。